

18世紀初頭のロシア外交官の活動

—スウェーデン駐在使節ヒルコフの書簡を手がかりに—

鈴木 佑 梨

はじめに

ロシアがバルト海の覇権をめぐるスウェーデンと争った北方戦争では、戦争を有利に進めるべく、軍事活動とともに外交活動が活発に行われた。ロシアは外交の重要性を認識しており、戦争以前から外交官を諸外国に恒常的に駐在させたり、西欧式の外交的慣習を取り入れたりするなど、外交の拡充・改革を始めていた。

また、ピョートル時代は社会の組織化・構造化の時代であり、人材や資源を各分野で有効活用することで、国家や君主が設定した目的の達成を目指した。それまでの官署制は、権限が重複し、不明瞭であったために非効率的であり、また一人の権力者による専断的支配に基づいていたため、問題解決能力が著しく低い仕組みであった。ピョートルは合議制に基づく参議会に見られるように、秩序立った合理的な国家制度や機関を作ることで、諸課題が適切に解決される国家を目指した。そしてこれらの機関は、勤務員が自らの能力を発揮することによって、機能することが期待された。

能力に基づく昇進原理を示した官等表の制定によって、貴族はロシア国家や君主が課した任務を遂行する国家勤務員として定義されたが、任務に足る最低限の教育と経験を持つ人材は乏しく、既存の貴族層の活用が不可欠であった。大使節団の派遣や貴族の子弟の留学は、彼らが西欧の文化、技術、言語を学ぶためのものであり、彼らを外交活動に関わらせるための経験の一つでもあった。しかし、実際に外交官として勤務することになる貴族たちでさえ、外交に関する体系的な専門教育もないまま、政府の様々な要求に対応せざるを得なかった。

本稿では、ロシア国家が社会の組織化・構造化を志向しつつも、実態としてはまだ整っていない、ピョートル改革の過渡期ともいうべきこの時期にスウェーデン駐在使節（резидент）であったアンドレイ・ヤコヴレヴィチ・ヒルコフ（Андрей Яковлевич Хилков）の書簡を分析して、その活動を明らかにし、ピョートル改革における外交官の活動を検討する。

○ヒルコフ略歴

ヒルコフ家はリューリク朝の流れを汲む名門の家柄で、アレクセイ帝の時代には、妃マリヤ・ミロスラフスカヤがヒルコフ家の血を引いていたことから、一族はツァーリと姻戚関係となり、側近として取り立てられた。ピョートルが1697年に大使節団を西欧諸国に派遣した際には、ヒルコフは兄二人とともに同行し、ヴェネツィア支配下のペラストで航海術や造船学、イタリア語を学んだ。帰国後まもない1700年4月21日¹に、ピョートルの勅令によってヒルコフはスウェーデン駐在使節として派遣された。しかし、ロシアがスウェーデンに宣戦布告し、ナルヴァを包囲したことが明らかになると、彼は1717年の死までスウェーデン政府の監視下に置かれることとなる。ヒルコフはモスクワ出発後、監視下からも本国に書簡形

式で報告書を送っていた。そこには彼が収集したスウェーデン軍の規模、戦いの様子、他国の動向、スウェーデン政府の高官、あるいは彼自身や「ロシア人」捕虜の置かれた状況や、ロシアの「スウェーデン人」捕虜²の待遇といったあらゆる情報が含まれている。

○研究史

ヒルコフの活動の背景となる北方戦争や18世紀の外交については帝政時代以来、研究が積み重ねられてきた。特に改革と結びつき、ヨーロッパ世界におけるロシアの立場を一変させることとなる北方戦争はロシア史において常に人気の高いテーマである。外交に関しても、バンティシ=カメンスキーによるロシアと西欧諸国との外交交渉を時系列に整理した研究、ピョートル期の外交を包括的に整理したモルチャーノフの研究、ロシアと西欧諸国の未刊行史料を用いて北方戦争期の国際関係とロシア外交を明らかにしたヴォズグリンの研究など、国際関係というマクロな視点に重点が置かれてはいるものの、一定の蓄積がある³。近年では実際に外交を担った外交官の活動への注目も高まりつつある⁴。しかし、これらの研究ではヒルコフが駐在使節としてスウェーデンに派遣されたという事実が触れられたのみで、具体的な活動について論じられることはなかった。

スウェーデンで始まった北方戦争の捕虜に関する研究は、ロシアにも広がり、ロシアの研究者たちによる捕虜研究が始まる。端緒としてポルタヴァの戦いでスウェーデン軍の捕虜となったイメレチア王国（グルジアの王国の一つ）の皇太子バグラティオーニ（А. Баграгиони）に関するヴァテイシヴィリの研究、ドルゴヴァによる「スウェーデン人」捕虜に関する史料紹介などが現れた⁵。ロシアとスウェーデンによって共同出版された論文集では、スウェーデンの研究者ユリクソンとビルゲゴロドが手稿史料を用いて、ヴィーシングスという都市における「ロシア人」捕虜、高位の「ロシア人」捕虜についてそれぞれ検討した⁶。その後、コズロフはスウェーデンに残された史料を主に用いて、両国間の捕虜の問題、政府対応や交渉について論じた⁷。このように捕虜研究が進む中で、徐々にヒルコフへ関心が向けられるようになる。コズロフは、ヒルコフについて一章を割き、自らも当事者でありながら捕虜解放に奔走する外交官としての活動について検討している。さらに付録として「ロシア人」捕虜たちの書簡を紹介し、その中にスウェーデン国立公文書館（以下、公文書館）（Riksarkivet, RA）所蔵のヒルコフに関わる書簡を21件含めている。また、ドルゴヴァはロシア国立古法文書館（古法文書館）（Российский государственный архив древних актов, РГАДА）に収められた彼の書簡を中心に、関連する命令やリストなど145件を収録した史料集を刊行し、ヒルコフの活動が明らかになりつつある⁸。

○使用史料

本稿では、ドルゴヴァの史料集を主として、適宜コズロフの史料を参照しながら、ヒルコフを取り巻く状況と彼の様々な活動を明らかにする。ドルゴヴァとコズロフの紹介によるヒルコフの書簡は、どちらもその大半が外交に携わる要人へ宛てたものであるが、コズロフの史料は、スウェーデン政府によって押収、検閲され、その後公文書館に保管されたものである。これらの書簡の多くは宛先に届かなかつたが、ドルゴヴァの史料は、スウェーデン政府が検閲の上で送付を許可したか、スウェーデン政府の監視をくぐりぬけて届けられたものかはそれぞれ異なるものの、宛先に届けられ、受取人がツァーリや使節官署長官ゴローヴィン（Ф. А. Головин）をはじめとした外交官であったため、スウェーデンとの外交関係に関する史料群（Ф. 96. Сношения России с Швецией）の一部として古法文書館に保存された。コズロフの研究では古法文書館の書簡を十分に検討しておらず、また古法文書館の書簡だけでは、ヒルコフが実際に書いた

たすべての書簡からかなり欠落があるため、両者を併せて見ることによって、より詳細に彼の活動が浮かび上がってくるであろう。なお、両国の書簡の比較によってスウェーデン政府の検閲基準も明らかになるはずであるが、今回の史料は一部に過ぎないため、今後の課題となる⁹。

1. 北方戦争までのロシア外交

○外交慣習

16-17世紀のロシアでは、使節の派遣に要する費用は自弁かつ膨大であったため、各国に駐在使節を置かず、個別の事案ごとに臨時の使節団を組織し、任務終了後に帰国させた。しかし、この仕組みは問題への対応が遅くなるという欠点があり、目まぐるしく国際情勢が変わる北方戦争前夜にはその限界を見せていた。そのため、ロシアは18世紀になると駐在使節を派遣するようになる。1724年には21の国と地域に駐在使節が置かれ、後任が到着するまで任地に残るといった慣習も生じた¹⁰。

一方、西欧諸国は交易や外交交渉のためにモスクワに常設の外交代表部を置こうと試みるものの、安定して継続させることができなかった。17世紀までのロシアには、使節団の食料や費用を負担するという東方的慣習があった。ロシアはその負担を嫌って使節団の常駐に対して消極的であり、たとえ認めても問題が起きれば容易にそれを廃止した。たとえばイギリスは17世紀に一人の代表者を居住させる権利を持ったが、1649年のイギリス商人追放とともに権利を喪失し、同時期に同様の権利を有していたポーランド、スウェーデン、デンマークも、長続きしなかった¹¹。

外交官と家族には到着から出国まで免責特権があり、刑事事件を起こしても裁判にかけられず、国外追放となるだけであった。また多くの場合、ロシアと相手国の間で締結された条約には、使節による両国の行き来が自由かつ安全、支障ないものであるように義務づける条項や使節を拘束しないことを保証する条項、さらには両国が敬意をもって使節を受け入れ、送り出すことを保証する条項が含まれていた¹²。

○ロシア＝スウェーデン関係

このような外交官をめぐる国際的規範は16-17世紀のロシアとスウェーデン双方においても遵守された。その中で両国は臨時使節を度々派遣し、休戦協定や恒久講和条約を締結した。

また17世紀初頭、アルハンゲリスクでロシアの穀物を免税価格で買うことを許可されていたスウェーデンは、1634年に両国間で対ポーランド軍事同盟の締結交渉が決裂し、ロシアが穀物売買に関する特権を廃止し、スウェーデン外交官の帰国を要求するまで、モスクワに自国の全権代表を恒常的に滞在させることを許された唯一の国家であった。その後も、スウェーデンはロシアに外交官を駐在させるべく、あえて外交官ではない者を使者として送り、交渉を続けていた。クニッペル(T. Knipper)の派遣もその一環であった。以前からモスクワで交易を行っていたクニッペルはその功績が認められ、のちにスウェーデン国王からクニッペルクロナという姓と貴族の位を与えられ、モスクワの駐在使節に任じられた¹³。一方、ロシアは駐在使節を持たなかったが、1637年にストックホルムにロシア商人による交易所を開いた。交易所に入りするロシア商人たちは交易と併せてロシア政府にとって重要な情報収集・伝達を担った¹⁴。

2. ヒルコフのスウェーデンへの派遣とその道程

クニッペルのスウェーデンへの報告は、ロシアに好意的で、両国関係を楽観視した内容が多かった。しかし1700年4月20日にロシア軍がナルヴァへの移動を命じられたという噂を彼が報告すると、スウェーデンはロシアへの警戒を強めてゆく¹⁵。

ロシアは戦争準備、およびデンマーク、ポーランドとの間で締結された対スウェーデン軍事同盟である北方同盟の内容をスウェーデンから隠す必要があった。そのため、ドルゴルーコフ（Я. Ф. Долгоруков）とシャホフスコイ（Ф. И. Шаховской）を使節として、交易と両国の平和条約締結に関する交渉のためストックホルムに派遣するとスウェーデンに通告し、彼らを迎える準備を行うべく、ヒルコフを駐在使節として先に向かわせることを決定した。出発前の4月21日付の命令で、ピョートルはヒルコフに翻訳官1名と書記官補2名を同行させ、スウェーデン国内の状況と国家制度、国境付近の要塞の防御実態などを知らせるよう命じた¹⁶。

スウェーデンへ向かう道中でヒルコフが作成した報告書には、宿泊地、各地の自然的特徴、各地点の距離、移動日数、馬車の交換、都市の要人との面会の様子、スウェーデン領に入ってから各地の要塞や工場といった設備などが詳細に記録されている。

たとえば6月1日にノヴゴロドから送られた書簡ではスウェーデン国王カール12世の所在について次のように記している。「ストックホルムからノヴゴロド人のイヴァン・アガピトフの使用人がアガピトフに書き送ったところによると、ストックホルムからリガに25隻の軍船が移動し、国王の遠征のために町を挙げてパンを焼いていると言います。国王は軍隊のもとに行くとのことですが、軍船はコリヴァン [現タリン] に向かっているにも関わらず、国王はまだストックホルムにいます。この話を私に伝えたノヴゴロドの商人エリセイ・フョードロフは、アガピトフが現在モスクワにいるため、この件をモスクワに郵便で送ったと話しました。一方、ヤコヴ・リヴォフ・セケリン [ノヴゴロドの士族] はコリヴァンとルゴディフ [現ナルヴァ] にいましたが、コリヴァンに15隻の軍船に乗った軍隊が向かっていることは聞いたものの、国王が来るという噂は知りませんでした。もし国王が軍隊のもとに行き、私に同行を命じるのであれば、私が国王を追うべきか、あるいはストックホルムに行くべきかをツァーリ陛下と閣下 [使節官署長官ゴローヴィン] が指示してください。なぜならば私への命令では国王のいるストックホルム、あるいは別の町に行くよう書かれているからです¹⁷。」

この書簡の主旨は、謁見のために国王を追って移動すべきか、首都ストックホルムに行くべきかという伺いを立てるものであるが、ノヴゴロドの士族や商人から、国王の居所についてのみならず、軍隊の規模や位置、都市における戦争準備といったスウェーデンとの戦争を控えたロシアにとって重要と思われる情報を入手し、それとなく報告している様子が窺える。

都市に関する情報も看過できない。7月4日の書簡ではナルヴァについて次のように続けている。「ルゴディフは絶え間なく建設され、強化されています。一方で兵士たちは最低限の人数しかおらず、非常に瘦せています¹⁸。」3か月後、ロシア軍はナルヴァを包囲した。

○カール12世による謁見

1700年7月中旬にストックホルムに到着したヒルコフが、各地の名士との会見や、謁見の打ちあわせなどを経て、近郊の町で陣中のカール12世による謁見を許されたのは8月19日になってからであった。謁見に際してヒルコフは「訓令に基づき」他国の大使や公使が同席することのないよう要求した。こうした申

し入れは17世紀のモスクワ公国時代に既に確立された、ロシアから派遣される使節の慣習であったが¹⁹、ヒルコフもこの慣習に基づいて申し入れを行い、認められた。国王は「立って、脱帽した状態で」ヒルコフを謁見し、ヒルコフは国書を進呈し、自身が西欧の教育を受け、洗練されていることを示すため、彼が知っている西欧の言語であるイタリア語で挨拶を述べた。ヒルコフは、謁見の流れや同席した人々について記録するだけでなく、装いを凝らした衣装に身を包んだ周囲の人々とは対照的に、普段の服を着用した国王に驚き、詳細を書き記している。そして「国王自身が窓に近寄り、中庭を眺め、国王のすぐそばには近衛兵が控えていた」ことを付け加えている²⁰。どこまで意図的であったか不明であるが、実際に目にしたカール12世の服装や振る舞いを報告することで、国王の人となりを示そうとした可能性がある。

国王から正式にストックホルム滞在許可を得たヒルコフであったが、不慣れで思うように任務を遂行できない不満を次のように書いている。「まだ国王の近くに来て日も浅いので、誰と話せばよいのかわかりません。翻訳官は非常にのろまで、こうしたことを一切知らないし、書記官補たちも非常に役立たずで、与えられたことさえできません²¹。」翻訳官は外国語の文書をロシア語に、あるいはロシア語の文書を外国語に訳すことが任務であり、書記官補は使節が相手と交渉に当たったり、話し合ったりする場合に発言を記録することが任務であった。そのため相手国で誰に会うべきか提言することは、彼らの本来の任務から逸脱しており、ヒルコフの不満は理不尽なものであった。

一方、ヒルコフがカール12世に謁見したその日、モスクワでは、大使節団のリガ滞在時に、要塞の地図が流出することを恐れた当局者によって使節団が宿泊施設から外出を禁じられたことを侮辱として、スウェーデンに宣戦を布告した。クニツベルは自宅軟禁となり、のちに妻子とも引き離された²²。

○虜囚生活のはじまり

ロシアによる宣戦布告がストックホルムに伝わったのは9月21日のことであった。その間もヒルコフはオスロの様子や他国の駐在使節たちとの面会、8月18日にスウェーデン・デンマーク間で締結されたトラヴェンタール条約の内容などを書き送っている²³。

10月になると、ヒルコフに監視がつけられた。「1700年10月9日、昼の3時、私の宿泊している屋敷にスパルヴェンフェルト [J. G. Sparwenfeld] ²⁴がやってきて、国王が私の所持品を記録して封印するよう、そして私に監視をつけ、屋敷から出ることを禁じるよう命じた、なぜならツァーリが我々の土地に軍隊を差し向け、ルゴディフに2回の進撃を行って包囲し、モスクワにいる我々の駐在使節クニツベルを屋敷で監視下に置いているからだと言いました。私は彼に、今私は国王陛下の領内にいるのだから、あなた方が望むのであれば、そうすればよいと述べました。しかし、私はツァーリ陛下の軍隊があなた方の土地にいるのか、そしてクニツベルが監視下に置かれているのか何も知らない、あなたからそのように聞いたのだと話しました。すると彼は、以上のことを遂行するよう市長 (бурми́стр) に命令が下されたと言いました。市長は48人の兵士を連れてきて、各部屋・各戸口に2人ずつ配置しました。私の寝室内には隊長と2人の兵士が配置されました。兵士はみな発射準備のできた武器を持っていました。私の使用人たちはみな遠ざけられました。私はここから出ることが許されず、外部の者のみならず私の使用人たちも誰も私の部屋に入室することが許されませんでした。そして彼は、司祭と翻訳官、小姓と料理人だけが屋敷に残ることが許されたと言いました。私とともにモスクワから送られた書記官補たちとその他の使用人たちはみな捕らえられ、牢獄に入れられました。私の所持品はすべて封印され、予備の部屋に持ち去られました。私に残ったのはその日寝台から起きたときに着ていた毛皮だけで、その日は夜までそれを着ていました²⁵。」同日深夜、スパルヴェンフェルトが政府高官に掛け合った結果、監視が部屋の外に置かれ、監視

つきではあるが、封印された所持品を取りに行くことができるようになった。スウェーデン側の対応は頻繁に変化するものであり、虜囚生活の間もこうした状況が続くこととなる。

3. 監視下から送られた軍事・外交情報

ヒルコフは監視下から様々な情報を書き送った。たとえば当時、カール12世の摂政の一人であったベント伯 (G. O. Bengt) を「国王不在のストックホルムを治め、国王のそばでは常に第一の人物」と評し、捕らえられたロシア商人たちを所持品返却の上、解放するよう書簡を送って働きかけた²⁶。

スウェーデン社会の事件についても報告を怠らない。教会やアカデミー、近隣の村まで焼け落ちたウプサラの大火 (1702年3月12日) についてもいち早く把握し、スウェーデン人たちが深い悲しみに満ちていることを知らせている²⁷。

スウェーデン軍に関する情報も注目すべきである。1701年9月の報告では次のように述べている。「カルマルにスウェーデン5個連隊が待機しており、海を渡ってリガ、コリヴァン、さらにセフに向かいます。これらの数は8000人と言われていますが、私は6000人と思います²⁸。」実際にはヒルコフの予測は外れ、国王の約10000人の軍隊はナルヴァ包囲軍を急襲し、不意を突かれたロシアは惨敗を喫することとなる²⁹。

特に詳しい記述はロシア軍の初勝利ともなる1701年12月29日のエラストフェルの戦いに関するものである。ヒルコフはこの時のスウェーデン軍の損失について、様々な情報を提示している。ハンブルクからの情報ではスウェーデン軍は8000人、荷車、大砲を失ったとし、スウェーデン政府が国内向けに発している情報では2個連隊の損失と4人の隊長が捕虜になったとし、さらにスウェーデン国内では5000人を失い、荷車を鹵獲された上で、3マイル後退せざるを得なくなったという情報もあるとした。一方で、スウェーデンの高官たちは、戦闘はロシア軍の精鋭10000人とわずかなスウェーデン軍で戦われたもので、スウェーデン側の損失は300人と6門の大砲の鹵獲で済んだというようにあたかもロシア側の損失が多いと認識している様子を示している。ヒルコフはこの勝利をスウェーデンの「忌々しいプライドを神が打ち砕いた」として喜んだ³⁰。

ヒルコフはスウェーデンと他のヨーロッパ各国との関係についても、目配りを忘れていない。1700年代前半、彼は特にポーランド方面の情報を熱心に収集した。1702年4月の書簡ではボンメルンからブランデンブルグ経由でポーランドに8000人のスウェーデン軍が進軍しており、カール12世がブランデンブルグ公に自軍の通行許可を要請したことを書き送っている³¹。

スウェーデンに対するイギリスとオランダの姿勢の変化も読み取ることができる。1700年7月4日の捕囚になる前の書簡ではスウェーデン海軍が両国の海軍の協力を得てデンマーク海軍の撃破を試みていることが記載され、両国が明確にスウェーデンを支持していることが窺える³²。ヒルコフに対して両国の使節たちは次のように語るが、ヒルコフは信じていない。「オランダとイギリスの全権公使たちは、彼らがスウェーデンを支持しているわけではないと弁解していますが、彼らはモスクワの軍隊と敵対するスウェーデンの援助者なので、既知の情報をすべてスウェーデンに教えるでしょう³³。」ヒルコフの不信は当然のことであったが、使節たちの発言は全くの虚偽ではなく、スペイン継承問題に関してフランスと対立していた両国は、金銭面や物資面で援助を申し出てスウェーデンへの接近を図っていたフランスの動きを見て、スウェーデンと距離を取りつつあった。そしてスウェーデンと比肩する海軍を有するデンマークと関係を深めてゆく。1704年にはヒルコフはこれについて次のように書き送っている。「デンマークとスウェーデンの間で戦争が起こった場合、イギリスとオランダがデンマークを援助すると思います。なぜな

らストックホルムからデンマークに頻繁に密使が送られているからです³⁴。」実際に、両国による対スウェーデン参戦の容認と、ロシアによる北方同盟再結成の働きかけにより、1709年以降、デンマークは戦線に復帰した。

軍事・外交に関わるヒルコフの情報源として、ロシア商人も重要であった。1702年12月9日の書簡では次のように述べている。「虜囚になっているロシア商人たちが語ったところによると、カネツから27露里〔1露里=1.067km〕の海上にコトリンという島があり、砂地と浅瀬のためにボート以外ではカネツから海に出ることができないと言います。通路はこの島の岸近くに運河のようなものがあるだけで、島に要塞を築けば、この場所を通行するのに有利となるでしょう。この提言を閣下のご意思とご判断にゆだねます。私は聞いたことを報告せずにはいられないのです³⁵。」

ヒルコフの提言は採用され、1703年にロシアが島を占領すると、ペテルブルク防衛のための要塞建築が始まった。1704年に要塞はクロンシュタットと名付けられ、1720年代以降、バルチック艦隊の主要基地として重要な役割を果たしていくこととなる。

以上のように、ヒルコフは様々な人々から主に軍事・外交に関わる情報を集めて報告した。その特徴として、ロシア政府が情報を吟味し、判断するように、情報の出所を極力明らかにし、自身の意見と分けて記載するなど、情報提供の役割を徹底して行ったことが挙げられる。こうして集めた情報を政府に送ることも彼の重要な任務であった。

○書簡の検閲

赴任当初、ヒルコフの書簡への検閲はなかったが、監視下に置かれると、書簡の原本や複製はスウェーデン政府の厳しい検閲の対象となった。その多くは差し押さえられ、本国に届くことはなかった。ヒルコフ自身、「私の書簡はすべて官房で翻訳されている」ことを把握しており、暗号やミョウバンインクを使用して検閲から逃れようとした。特にゴローヴィンには再三、送られた書簡や封筒を火で炙り、通常の記事の行間や余白に浮かび上がる文字を読むよう書き送っている³⁶。しかし、スウェーデン政府もそうしたことを見越していた。コズロフによると、スウェーデン公文書館所蔵のヒルコフや他の高位の捕虜たちの書簡の多くには、火で炙った跡や文書を水やその他の液体に浸した形跡が見られるという。これは明らかにスウェーデン政府が書簡に隠された秘密の文章を徹底的に探そうとした跡であった。こうした秘密の文章は通常の記事の後に書かれ、ほぼ完全に再現することができた³⁷。

○書簡の送付方法

書簡は当初、ブランデンブルグを経由していた。ヒルコフは1700年10月頃に次のように書いている。「[[監視があるので] 秘密裏に私に何か書くのは不可能です。しかし可能性があれば、私はあなたに書簡を送ります。もし、私宛に書簡を送るのであれば、ブランデンブルグの全権公使を経由すれば確実です。彼はとても善良で、ブランデンブルグ公にあらゆる報告を行う有能な人物です³⁸。」ここでヒルコフが言及している公使はバント伯の甥にあたり、ヒルコフは彼を「特別な友人」と称し、公使経由で情報を得て、書簡を送る時は公使が自身の書簡に含めてブランデンブルグに送り、そこからモスクワに急使で送るとしていた³⁹。

しかし開戦後のヒルコフを取り巻く状況は不安定で、書簡の送付経路を変更せざるを得なくなる⁴⁰。協力者によって秘密裏に送られる方法は具体的には書かれていないが、在コペンハーゲンのロシア大使イズマイロフ(A. П. Измайлов)を経由していたようである。そのため、ヒルコフはゴローヴィンに、必要

があればコペンハーゲンを通して暗号で書き送るよう要求している⁴¹。

4. 捕虜問題

情報収集と同様にヒルコフの重要な任務であったのが「ロシア人」捕虜の状況把握、待遇改善・交換・解放交渉であった。

○捕虜の発生

ロシアの宣戦布告とともに、スウェーデン政府は自国領内にいるすべてのロシア臣民に出国を禁止し、所持品を没収の上、投獄した。そのため、戦争最初期の「ロシア人」捕虜はストックホルムやその他の都市で交易に従事する商人や、交易品を運ぶ船で働く労働者であった。彼らはやがて過酷な環境下で労働を強いられるようになる。1か月後、ヒルコフは彼らの状況について次のように書いている。「商人たちは半年で半分以上が死ぬでしょう。なぜなら彼らは貧しく、飲むものも食べるものも何もないからです。唯一の支えは私が定期的に送る自分のパンと肉ですが、それがなくなれば、私自身も飢えて死ぬでしょう。ああ、閣下、私には100ルーブルありますが、どのように生きていけばよいかわかりません。[スウェーデン政府が] 商人たちに貸付けることを願っていましたが、彼らは商人たちが飢えて死ぬようにすべてを巻き上げました。…(中略)…制約があるとしても、私が各国の全権公使たちにあらゆる方法で援助を求めることができるストックホルムの方がはるかにましです。捕虜たちが拘留されている他の町では、飢えとその厳しさのために彼らの半分はもう生きていないと思います。死ぬまで打たれたようだということも聞きましたが、確実な情報はありません⁴²。」

戦闘が進むにつれて、いわゆる戦争捕虜が増えていく。ナルヴァの戦いでは、バグラティオーニ (A. A. Баграиони)、デ・クロイ (C. C. de Croy)、ゴローヴィン (A. M. Головин)、ドルゴルーフ (Я. Ф. Долгоруков)、ヴェイデ (A. A. Вейде)、ブトゥルリン (И. И. Бутурлин) といったロシアの将官や兵士たちが多く捕虜となった。ヒルコフやドルゴルーフは、商人や兵士などの「ロシア人」捕虜に可能な限り食料を差し入れたが、彼らの状況は依然として厳しいものであった。また、ヒルコフら高官であっても滞在費や必要な物を自弁しなければならなかったため、彼らはしばしば困窮し、度々ロシア政府や親族に送金を要求する書簡を送った。

○捕虜の待遇：相互主義

スウェーデンの「ロシア人」捕虜の待遇はロシアの「スウェーデン人」捕虜の待遇によって左右され、また「スウェーデン人」捕虜の待遇は「ロシア人捕虜」の待遇によって変化するという相互主義的なものであった。たとえば、1702年にクニッペルがモスクワで一定の自由を与えられ、住まいも食べ物も十分満足できる状況にあること、またスウェーデン兵士が数人解放されたことが明らかになると、ヒルコフには銀食器やロシアの貨幣以外の所持品が返却された⁴³。

ヒルコフは「スウェーデン人」捕虜、特に自分と同じ立場のクニッペルの状況を注視し、気にかけていた。クニッペルが帯剣して外出できると知ると、クニッペルにスウェーデン政府に自身の状況を伝えてロシアの高官たちがヒルコフを訪ねる許可を与えることを依頼するよう、ゴローヴィンに書き送っている⁴⁴。結果として、ロシアの高官たちはサウナや日曜の教会、あるいはヒルコフのもとを訪ねることが許された⁴⁵。

その一方で、「スウェーデン人」捕虜の状況が悪化したと判断されれば、これらの許可は簡単に取り消

された。こうした捕虜の待遇をめぐる相互的な関係は、クニッペルの流刑の噂を知ったスウェーデン政府が取り消しを求めてヒルコフに書かせた次の書簡に顕著である。「クニッペルクロン氏が所持品をすべて剥奪された上でモスクワからおそらくシベリアに流刑にされると言われています。隊長や将官たちも様々な都市に送られるということですが、それに対して我々に同様の措置が取られると警告されました。もし彼らがそれぞれの町に流刑に処されているのであれば、彼らをモスクワに戻し、ここで以前我々に許されていたのと同等の自由を彼らに与えるよう、閣下に慈悲を乞う書簡を書くことが許されました。我々の苦難を免れるために、クニッペルクロン氏と将官たちに寛大な閣下の慈悲が与えられ、彼らがモスクワで暮らせるよう、そして我々に以前許されていたように、他人を交えず彼らだけで会えるよう、そして教会に行けるよう心よりお願い申し上げます⁴⁶。」ヒルコフは兄弟たちにも同様の書簡を送り、ツァーリに嘆願するよう訴えたが、状況を変えることはできず、ヒルコフら「ロシア人」捕虜たちもストックホルム以外の都市に流され、「スウェーデン人」捕虜がモスクワに戻れば、ストックホルムに戻れると言われたと述べている⁴⁷。

自らと「ロシア人」捕虜の待遇改善のために、再三に渡り、クニッペルら「スウェーデン人」捕虜の待遇改善を要求していたヒルコフであったが、クニッペルが「ロシア人」捕虜の待遇向上を求めて書き送ることにそれほど熱心ではなかったために次第に不満を募らせてゆく。その不満は、やがて自らと同様にクニッペルも秘密裏に本国に書簡を送っているという確信となり、彼への警戒を強めるよう提言することとなる⁴⁸。「信頼できる者以外はロシア人でもクニッペルに会わせないように、教会に行くときは、彼らが秘密裏に書簡の受け渡しをしていないか見張るようにしてください。将官たち〔捕虜〕に監視つきで散歩を許可してもよいですが…（中略）…彼らが会うときには、ここスウェーデンでの私たちの状況と同じになるように、通訳官を常に同行させてください。ここでは私たちが会うときは、いつも通訳官がそこにいて、私たちの話を聞いているのです⁴⁹。」

○改宗や結婚に伴う待遇改善

ヒルコフは「ロシア人」捕虜のリストをいくつか作成し、「ロシア人」捕虜の身分やそれぞれの所在地、生死などを記載している。そこでは少ないながらも、スウェーデンの宗教を受容したり、国王の召使いと結婚したりすることで、スウェーデンの臣民と見なされて捕虜ではなくなった者たちがいることが確認される。たとえばゲラート・スミニユスという捕虜については次の通りである。「昨年改宗した。カルヴァン派を棄教し、ルター派を受容した。その時から自由の身となり、帯剣している。同じく昨年、スウェーデンのリフリャンディヤ連隊の勤務となり、ドゥグラス大佐の下で中尉として登録された⁵⁰。」彼らの多くは名前から非ロシア人と推測されるが、中にはノヴゴロドの士族フョードル・アフアナシエフ・グリエフのようなロシア人も含まれていた⁵¹。

○捕虜解放・交換交渉

ナルヴァの戦いで多くの将官が捕虜となったロシアは戦争当初から捕虜の解放・交換交渉に積極的であった⁵²が、交換対象となる「スウェーデン人」捕虜に高位の者が少なかったため、スウェーデン政府は熱意を示さなかった。1709年のポルタヴァの戦いにおけるロシアの勝利は、ロシアに「スウェーデン人」捕虜をもたらし、その中に高官が多く含まれていたことから、スウェーデン政府にも捕虜の交換や解放を求める機運が高まった。しかし、カール12世が否定的であり、また両国が互いに有利に交渉を進めようとしたために交渉は遅々として進まなかった。バグラティオーニの交換交渉の顛末はその様子を示してい

る。

ポルタヴァの戦い後、バグラティオーニは解放されることとなったが、途中の町で病死し、スウェーデン政府が遺体の返還を拒否するという事態となる。ピョートルは元老院に問題解決を指示し、ヒルコフもスウェーデン政府に積極的に働きかけた。

1711年3月にヒルコフは、国王の留守を預かる王妹ウルリカ・エレオノーラにバグラティオーニの遺体を返還するよう嘆願書を送り、国王と王妹がバグラティオーニの捕虜交換を許可した慈悲深さを称え、その慈悲を彼が亡くなった今、改めて示すよう請願した。そして暖かくなると遺体が腐敗してしまうため、できるだけ早く、まだ寒いこの時期に遺体をロシアに返してほしいとも述べている。さらに、長く捕虜であったために故人が生きて家族に再会できなかったことを指摘し、彼らを亡骸に会わせてほしいと訴えた。一方で、ヒルコフは本国の使節官署にも遺体の返還交渉を成功させるよう、また遺体をロシアに運ぶために3人の「ロシア人」捕虜の交換を早急に実現するよう嘆願した。こうしたヒルコフの努力にも関わらず、返還が実現したのは2年後のことであった⁵³。

○望郷の念

ヒルコフは「ロシア人」捕虜の交渉を行いながら、同時に自らをクニッペルと、彼の死後は彼の妻子と交換するよう再三要求していたが、実現することはなかった。彼の望郷の思いは家族を案じる数々の書簡に現れている。1715年の兄弟への書簡には次のように記している。「神よ、私たちが生きてすぐに会えますように。娘は私のすべての不幸を打ち消す存在ですが、娘に会えないことは、一層ひどく私を打ちめします。私は彼女を助けることもできません。もし今後私が不幸にも交換されないことがあれば、(私はそうは思わないのですが、)どうか娘を嫁がせてください。彼女の求婚者たちについて、私に知らせてください。後で私が検討して彼女に誰を選ぶか、すべてあなたに書き送ります⁵⁴。」

おわりに

これまで見てきたように、駐在使節として派遣されたヒルコフは、国家から課された職務に熱心に取り組んだ。それは彼の責任感や自らも捕虜という当事者としての切迫した思いに根差すものであったかもしれない。外交に関する専門教育もなく、赴任当初は「誰と話していいかわからない」状態であったものの、彼は他国の駐在使節たちやスウェーデンの貴顕、自国の商人などに関わる中で、主に外交や軍事に関する情報を集めた。監視下に置かれても、危険な状況下で可能な限り情報を収集し、同胞たちの待遇改善、交換、解放に尽力した。

ピョートルは戦争と並行して合理的で組織的な国家制度を整え、貴族たちには能力を示すことによって、こうした制度を支えることを求めた。ヒルコフの活動に明らかであるように、これらの国家の要求に対する献身や適応は、同時期の他の「ロシア人」外交官にも見られた現象であったが、ヒルコフの場合は特に、自らの勤務の成果がその生死に直結するという顕著な緊迫感の中にあった。本国と遮断された環境においてヒルコフが収集した様々な情報とその詳細、「ロシア人」捕虜問題への取り組みからは彼が国家の課題に立ち向かい、解決してゆく姿が見える。しかしそれはあくまでも彼個人としての能力や努力によるものであり、組織として課題を解決しようとする国家制度の前段階、ピョートル改革前夜の外交官の姿を見ることができないのではないだろうか。

註

- 1 本稿ではユリウス暦を用いる。18世紀においては11日を加えるとグレゴリウス暦となる。
- 2 ロシア語の史料や先行研究ではрусские пленныеという語が当てられ、直訳ではロシア捕虜ないしはロシア人捕虜となるが、前者ではロシアによって捕らえられたスウェーデン（人）の捕虜という意味と混乱する可能性があり、後者は捕虜に非ロシア人を多く含んでいたことから最適とは言い難い。また商人などの非戦闘員も含まれていたためスウェーデン軍捕虜と意識することも不正確である。そのため本稿では捕虜となった段階で勤務などを通じて一時的であってもロシア国家に属しているとみなされた者を「ロシア人」、スウェーデンの場合は「スウェーデン人」とし、それぞれ「ロシア人」捕虜、「スウェーデン人」捕虜と表記する。
- 3 Бантыш-Каменский Н. Н. Обзор внешних сношений России (по 1800 г.): Ч. 1-4. М., 1894-1902.; Молчанов Н. Н. Дипломатия Петра Первого. М., 1984.; Возгрин В. Е. Россия и европейские страны в годы Северной войны: История дипломатических отношений в 1697-1710 гг. Л., 1986.
- 4 一例としてКосинцев Ю.Г. Борьба В. А. Долгорукова за возвращение Дании в Северный союз в 1709 году // Вестник пермского университета. Пермь. 2016. вып. 1. (32) , С. 67-76.
- 5 Ватейшвили Д. А. Грузия и европейские страны. Т. 2. Побратим Петра Великого. Жизнь и деятельность Александра Багратиони. М., 2003.; Долгова С. Р. «А паче всего слезно просим милости незабвенны мы были о свободе своей ...». Русские пленные в Швеции в годы Северной войны (1700-1721 гг.) // Исторический архив. 2009. № 3 С. 9-15.
- 6 Полтава: Судьбы пленных и взаимодействие культур. М., 2009. 日本における捕虜研究として、入江幸二「大北方戦争期のスウェーデン捕虜」『北史研究』第28号、2011年、15-22頁。田中良英「スウェーデン軍捕虜とピョートル改革」『宮城教育大学紀要』第54巻、2020年、63-78頁。
- 7 Козлов С. А. Русские пленные Великой Северной войны 1700-1721. СПб., 2011.
- 8 Эпистолярное наследие русского резидента в Швеции А. Я. Хилкова 1676-1717: к истории Северной войны: Сборник документов. М.; СПб., 2015.
- 9 コズロフの掲載史料の選択基準は不明であるが、ドルゴヴァに関しては、古法文書館の目録と照合することで、ある程度推測することが可能である。目録によると、古法文書館所蔵の書簡は1700-1709年、1711-1714年まで存在し、1710年、1715-1717年のものは存在しない。ドルゴヴァの史料集は上記すべての時期を網羅しているものの、目録と照合すると、掲載されていない書簡もある。複製のみを省略したのか、その他の選定基準があったのかは実際の史料原本と併せて検討しなければ確定できないが、その大半が掲載されているところから、前者であろうと考えられる。
- 10 Капустин М. Н. Дипломатические сношения России с Западной Европой во второй половине XVII в. М., 1852. С. 49-50.; Александренко В. Н. Русские дипломатические агенты в Лондоне в XVIII в. Варшава, 1897. Т. 1. С. 103-104.
- 11 松木栄三『ピョートル前夜のロシア—亡命ロシア外交官コトシーヒンの手記』彩流社、2003年、303頁。
- 12 Полное собрание законов Российской империи. Т. 1. № 240. С. 468-478., № 301. С. 532-551.
- 13 Иванов К. В. Дипломатическое представительство Швеции в Москве в XVII в. // Шведы в Москве: Материалы российско-шведской научной конференции. М., 2002. С. 39-42.
- 14 Шаскольский И. П. Экономические отношения России и Шведского государства в XVII веке. СПб., 1998. С. 81-88.
- 15 Форстен Г. В. Сношения Швеции и России во второй половине XVII века // Журнал Министерства народного просвещения. СПб., Ч. 325. 1899. С. 90-91.
- 16 РГАДА Ф. 96. Оп. 1. 1700 г. Д. 11. Л. 1. (Эпистолярное..., С. 20.)
- 17 以下引用のヒルコフの書簡について、註でРГАДАとあるものはロシアまで届いた書簡、RAとあるものはスウェーデンに残された書簡である。РГАДА Ф. 96. Оп. 1. 1700 г. Д. 10. Л. 66. (Там же. С. 48-50.)
- 18 РГАДА Ф. 96. Оп. 1. 1700 г. Д. 10. Л. 80-80 об. (Там же. С. 52-53.)

- 19 松木 『ピョートル前夜のロシア—亡命ロシア外交官コトシーヒンの手記』、101頁。
- 20 РГАДА Ф. 96. Оп. 1. 1700 г. Д. 11. Л. 1-26. (Там же. С. 31-32.)
- 21 RA, *Extrenea*, 156.3, № 16/2, (Козлов С. А. Указ. соч. С. 292.)
- 22 Рычаловский Е. Е. Резидент Томас Книпер в России в петровскую эпоху // Шведы в Москве: Материалы российско-шведской научной конференции. М., 2002. С. 62-79.
- 23 РГАДА Ф. 96. Оп. 1. 1700 г. Д. 11. Л. 1-26. (Эпистолярное..., С. 20-48.); RA, *Extrenea*, 156.3, № 16/3, (Козлов С. А. Указ. соч. С. 293-294.)
- 24 ロシア滞在歴があり、スラヴ語辞典を編纂していたスパルヴェンフェルトは、ヒルコフら高位の「ロシア人」捕虜たちに好意的で、ロシアの友人と書き記している。ヒルコフ自身も彼を友人としてゴローヴィンに書き送っており、捕虜生活の中で彼を通じて情報を得たり、スウェーデン政府に訴えたり、彼がロシア滞在中に集めた書籍や資料を用いてロシア史の研究を進めていた。
- 25 РГАДА Ф. 96. Оп. 1. 1700 г. Д. 10. Л. 112-113 об. (Эпистолярное..., С. 63-65.)
- 26 РГАДА Ф. 96. Оп. 1. 1700 г. Д. 10. Л. 112-113 об., 109-110. (Там же. С. 63-65., 66-67.)
- 27 РГАДА Ф. 96. Оп. 1. 1702 г. Д. 1. Л. 16-16 об. (Там же. С. 108-109.)
- 28 РГАДА Ф. 96. Оп. 1. 1701 г. Д. 2. Л. 14-14 об. (Там же. С. 90-91.)
- 29 阿部重雄 『タチーシチェフ研究—18世紀ロシア—官僚—知識人の生涯と業績—』 刀水書房、1996年、61頁。
- 30 РГАДА Ф. 96. Оп. 1. 1702 г. Д. 1. Л. 1-1 об., 10-10 об. (Там же. С. 97-99., 102-104.)
- 31 РГАДА Ф. 96. Оп. 1. 1702 г. Д. 1. Л. 13-13 об. (Там же. С. 106-108.)
- 32 РГАДА Ф. 96. Оп. 1. 1700 г. Д. 10. Л. 80-80 об. (Там же. С. 52-53.)
- 33 РГАДА Ф. 96. Оп. 1. 1700 г. Д. 10. Л. 124-125. (Там же. С. 60-62.)
- 34 РГАДА Ф. 96. Оп. 1. 1704 г. Д. 1. Л. 3-3 об., 4 об. (Там же. С. 170-171.)
- 35 РГАДА Ф. 96. Оп. 1. 1702 г. Д. 1. Л. 41-41 об. (Там же. С. 133-136.)
- 36 РГАДА Ф. 96. Оп. 1. 1701 г. Д. 2. Л. 16-16 об., 20 об. (Там же. С. 91-93.)
- 37 Козлов С. А. Указ. соч. С. 242-243.
- 38 РГАДА Ф. 96. Оп. 1. 1700 г. Д. 10. Л. 114-117 об. (Эпистолярное..., С. 70-77.)
- 39 РГАДА Ф. 96. Оп. 1. 1700 г. Д. 10. Л. 99-99 об., 109-110. (Там же. С. 58-59., 66-67.)
- 40 ヒルコフら高位の捕虜は、検閲はあったものの、健康・送金要求・家の必要事項に関して本国に書き送ることが認められていたが、状況次第で度々、紙やインクを取り上げられ、書くことを禁じられた。РГАДА Ф. 96. Оп. 1. 1702 г. Д. 1. Л. 25-26 об. (Там же. С. 118-122.)
- 41 РГАДА Ф. 96. Оп. 1. 1705 г. Д. 1. Л. 7-9. (Там же. С. 183-184.)
- 42 РГАДА Ф. 96. Оп. 1. 1700 г. Д. 10. Л. 111-111 об. (Там же. С. 69-70.)
- 43 РГАДА Ф. 96. Оп. 1. 1702 г. Д. 1. Л. 13-13 об. (Там же. С. 106-108.)
- 44 РГАДА Ф. 96. Оп. 1. 1702 г. Д. 1. Л. 7-7 об. (Там же. С. 101-102.)
- 45 РГАДА Ф. 96. Оп. 1. 1702 г. Д. 1. Л. 28-29 об. (Там же. С. 123-124.)
- 46 RA, *Extrenea*, 156.5, № 8, (Козлов С. А. Указ. соч. С. 297.)
- 47 RA, *Extrenea*, 156.5, № 16., RA, *Militära*, 1520. (Там же. С. 297-298., 298-299.)
- 48 РГАДА Ф. 96. Оп. 1. 1706 г. Д. 1. Л. 1-2. (Эпистолярное..., С. 185-186.)
- 49 РГАДА Ф. 96. Оп. 1. 1706 г. Д. 1. Л. 30-41. (Там же. С. 199-203.)
- 50 РГАДА Ф. 96. Оп. 1. 1705 г. Д. 2. Л. 3-10. (С. 285-292.)
- 51 ロシアでは「スウェーデン人」捕虜に対する結婚や改宗が強制されていたようであるが、本リストでの結婚や改宗例はわずかで、これらが自発的なものか強制的なものかは判断できない。(田中「スウェーデン軍捕虜とピョートル改革」、69-70頁。)
- 52 註50のリストや次の史料からは1705年にはロシア側に捕虜交換の準備があったことが窺える。RA, *Extrenea*, 156.5, № 7, (Козлов С. А. Указ. соч. С. 296.)
- 53 РГАДА Ф. 96. Оп. 1. 1711 г. Д. 1. Л. 4-4 об., 5-5 об., 15-16. (Эпистолярное..., С. 217-218., 218-219., 238-239.)

54 *RA, Extremea*, 157.3, № 2/2, (Козлов С. А. Указ. соч. С. 309-310.)

〔付記〕 本稿は日露青年交流センター2020年度若手研究者等フェローシップ《日本人研究者派遣》による研究成果の一部である。

